

社団法人能水会

第 11 号

2012年9月発行

会長就任のご挨拶

一般社団法人能水会
会長 岩崎 昇 (新16製)

能水会会員の皆様にかかれましては、ご清栄にてご活躍の事とお慶び申し上げます。

平素は、能水会の為に、深いご理解とご協力を戴きまして、心より御礼を申し上げます。



6月9日(土)母校新潟県立海洋高等学校で開催されました平成24年度一般社団法人能水会定時総会に於きまして、田中前能水会会長及び理事長様の退任に伴いまして、能水会会長に選出を賜りました。

伝統ある能水会の発展に、ご尽力を戴き立派に、任を果たされて来られました歴代会長の後継を担う事になり、不安と戸惑いが、御座いましたが、お引き受けを致しますからには、過去の先輩諸氏の方々のご努力で築き上げられて来られました伝統を継承し「母校を思う心」を持って能水会の発展と親睦融和、母校の発展の為に微力を尽くして参ります。

同窓会活動を取り巻く環境も、少子高齢化が進み極めて厳しい現実と、向き合っていく行かなければなりません。長男長女と言う家族構成で、卒業後は出身地での定住型志向になっており、今後更に支部活動が厳しさを増して参ります。このような現実と、しっかり対峙し支部活動の活性化策の構築を急がなければならないと、考えております。

今、能水会の最も重要な課題は、本会の運営原資であります会員の皆様からの年会費収入の減収にあります。

一般社団法人能水会の目的は、母校の海洋高等学校の発展と、会員相互の親睦融和を図る事にあります。会員と母校をつなぐ「絆」として発刊をさせて頂いております会報誌「日本海」を通じての、納入金も運営原資の大きな支えになっております。この主旨をご理解戴き、ご協力を心よりお願い申し上げます。

田中前能水会会長様をはじめ本部事務局の皆様のご足掛け5年に及ぶ、ご努力と、ご苦勞により今回「一般社団法人能水会」への移行申請及び定款変更手続きを済まして4月1日に一般社団法人能水会への移行を果たしました。本会は、更なる産業教育発展に貢献をして行く為に、産

業教育支援制度を設立し、経済的に恵まれず就学が困難な生徒や、優秀な生徒の奨学育英と産業教育活動への支援活動を行ってゆく事と致しました。

新しい法人に変わり、新しい定款の目的及び事業内容と致しましては、従来の鳴雛寮の管理運営・会報会員名簿の発行に加え、奨学育英基金制度を含む教育活動支援制度の運営が、明記され通年事業として取り組んで参りたいと考えております。

教育環境の変化と、少子化現象が進行する中で、母校への受験希望者が減少し定員割れが、恒常化している現状を他校に無い特徴ある学校づくりと、他校に無い教育活動支援制度を、活用し、一人でも多くの受験希望者が増え、優秀な生徒達が安心して学び、倶楽部活動や研究活動に勤しみ、豊かな人間形成に役立てて欲しいと思っております。

今、母校の海洋高等学校では、学校長をはじめ学校全体で県内中学校を訪問され、体験入学・出張学校説明会・学校見学・等の手段を駆使され、生徒募集活動に懸命に、取り組まれておられます。

一般社団法人能水会と致しましても、新たな取り組み事業としての奨学育英基金制度を含む教育活動支援制度を通じ、母校の永続的発展を願い、同窓会としての機能を発揮し、母校への支援に貢献して参りたいと考えております。

会員各位にかかれましては、この主旨を是非ご理解を賜りまして、ご協力とご支援を心より、お願い申し上げます。次第で御座います。

会員の皆様には、益々のご健勝と、ご多幸を心よりご祈念を申し上げ一般社団法人能水会会長就任のご挨拶とさせていただきます。

新任御挨拶

新潟県立海洋高等学校長 山岸 克夫

この4月からお世話になっております。よろしく申し上げます

前任校は県立直江津高等学校・直江津中等教育学校です。直江津高校は昨年度、創立100周年と閉校を同時に迎え、式典関係も無事終了し直江津高の歴史と伝統を直江津中等に引き継ぐこ



とができたのではないかと考えております。

一方、着任しました海洋高校は、今年度創立114年目、海洋高校と改称し20年目を迎えました。今年度から創立記念日を授業日とし、全校集会を行い、海洋高校のこれまでの歴史と伝統について生徒に話をしました。講話のために、なぜ6月13日が創立記念日となったかを調べてみました。記念誌「九十年の航跡」中の対談によれば、明治41年に本校が郡立から県立水産学校へと移管し、明治44年に木造校舎が完成し、落成式に当時の県令(県知事)が来校されたそうですが、その日を創立記念日としたそうです。(当時、汽車の便は直江津までしかなく、直江津から能生までは船で来られたそうです。)そのほか、校訓、校歌、校章、越山丸について、また、昭和20年代に入試倍率が4倍強の年もあり、全国から精鋭が集結した時代があったことなどについても話をしました。

現在、必ずしも募集定員が埋まらず、不本意な思いがあります。入学した生徒には基本的な生活習慣(挨拶、言葉遣い、服装、身なり等)を確立すること、そして、卒業するまでには、「人から信頼され、社会に役立つ人間」となるよう指導しております。地域の企業の方からは、海洋高校の卒業生は本当によく働いてくれるとお誉めの言葉をいただいております。引き続き、水産・海洋系の専門高校の特色を活かし、社会に有為な人材の育成を目指していきたいと考えております。

最後になりましたが、能水会からは、鳴雛寮の管理運営、生徒会への補助、相撲部への支援など物心両面から御支援御協力をいただいておりますことに衷心から感謝申し上げます、挨拶とさせていただきます。

会長退任にあたって

一般社団法人能水会
前会長 田中 勉 (新9製)

私は前任の山崎光雄会長さんのもとで平成18年から3年間副会長を務め、平成21年から今年まで3年間会長を務めさせていただきましたが、去る6月9日開催された通常社員総会で会長を退任させていただきました。この間副会長さんをはじめ役員の方々や事務局職員の方のご協力により、何とか大任を果たすことが出来深く感謝しております。

6年間の在任期間中の思い出といたしましては、平成20年10月に行われた母校創立110周年記念事業実施に当たり、山崎実行委員長さんのもとで学校長、PTA会長さんとともに副実行委員長として、記念式典び募金活動や記念事業を盛大に無事実施できたことが大きな喜びとして思い出されます。



能水会顧問 新7製造 小川和雄氏 新潟県議会第90代議長に就任

【議長就任挨拶】

平成24年7月13日

議長の就任に当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

ただいま、議員の皆様からご推挙を賜り、歴史と伝統ある新潟県議会の第90代議長に就任いたしました糸魚川市選挙区選出の小川和雄でございます。

議員各位に深く感謝申し上げますとともに、その職責の重さに身の引き締まる思いであります。昨年は、東日本大震災に始まり、本県においても長野県境地震、豪雨災害など災害が頻発した年でありました。



今年に入ってから、引き続き豪雪災害、地滑り災害など災害が頻発しております。改めて、災害によりお亡くなりになられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに、災害に遭われた方々の一日も早い復旧をご祈念申し上げる次第であります。

私は、平成7年4月の初当選以来、地域の皆様からの厚いご支援を賜り、17年間にわたって県議会議員を務めさせていただきました。その間、一貫して糸魚川地域の振興はもとより、広い県土を有する新潟県の均衡ある発展と県民福祉の向上を目指し、そこに住まう人々の明るく幸せな笑顔を数多く見たいとの強い気持ちで、一意専心してまいりました。

今、この場に立たせていただき、改めてふるさと新潟をより良くしたいという思いを強くしたところでありました。

8月2日に小川和雄さんの事務所、(糸魚川市横町2丁目)を訪問しました。公務多用と聞いておりましたが当日は実家に戻られており快く応接してくれました。

現在74歳とは思えない元気良く、これからの福祉社会の在り方、元気のいい地域づくりを熱っぽく語られ、母校の校訓の実践者たらんと、常に目標を持ち如何なる仕事にも全力で取り組んできたことを伺いしることが出来ました。「地域愛」ロマンを語る姿、これこそ能水卒業生の真骨頂を見ました。

(編集委員会 記)

平成24年度一般社団法人能水会 定時社員(代議員)総会開催

能水会事務局長 渡辺 宏幸

平成24年6月9日一般社団法人になって初めての総会が母校海洋高校において、新校長の山岸克夫校長の臨席を賜り開催された。当日の次第に沿って簡単ではありますが、ご報告致します。

1 田中 勉会長挨拶

平成24年度一般社団法人の定時社員総会にご出席いただき大変ありがとうございます。昨年の総会で、6月16日としていたが、母校が海洋高校に改称し20周年にあたることから、記念の体育祭が開催されることになり、総会の日程を変更することになった。急な変更により、ご出席できない方もあり、大変ご迷惑をおかけしたことをお詫びする。

法律の改正により、社団法人や財団法人の公益法人は、来年11月までに新制度による法人の移行をすることになり、昨年の総会において定款変更の議決をお願いした。

そして、移行許可作業も終了し、3月26日に県の認可があり、4月1日付けで、一般社団法人能水会となった。

新法人となって大きく変わった点は3点ある。

1点目は、定款の目的事業の中に、奨学育英基金制度を含む教育活動支援制度の運営に取り組むことにしたこと。現在もやっている鳴雛寮の運営、会報や会員名簿の発行を明記したこと。

2点目は、会員数が1万名近くになり、代議員制でなければ会の運営が困難である。総会は、会員の中から選任された社員により開催することとし、代議員制を明記したこと。

3点目は、支部の位置付けを定款に明記したことである。

今回の総会は、新法人移行後の最初の総会である。通常の総会の議案の他に、新定款の規定に基づく社員の選任、理事・監事の役員、各支部長の選任が必要となる。また、一昨年の総会で、東京支部より提案があった、奨学育英基金制度について、具体的、本格的な作業を進めていく。

今までは、任意団体の慣習的な運営に頼るものであり、定款どおりの運営が図られていなかったところが多く、県の法人指導監査で、指摘事項となっていた。

今回の総会にあたり、5月30日に新定款に基づく法人設立当初の役員による理事会を開催し、提出議案の審議をおこなった。

限られた時間の中ではあるが、慎重、審議をいただき、建設的なご意見をいただきたい。

2 山岸克夫学校長挨拶

能水会総会の開催、誠にありがとうございます。能水会の皆様には、日頃から、鳴雛寮の管理運営、生徒会への援助、相撲部の応援など物心両面にわたるご支援をいただき、厚く御礼申し上げます。

4月に直江津高校・直江津中等教育学校から参りました。糸魚川市、旧青海町の出身です。

学校の現況であります。生徒には基本的な生活習慣、あいさつ、言葉遣い、服装や身なりを確立させ、「人に信頼され、社会の役に立つ人間」となるよう指導している。

4月には弁天岩付近で養殖していたマコンブの取り入れを行い、5月には3年海洋生産コースがウラジオストクへの8日間の乗船実習を行った。相撲部が、インターハイ、国体と合わせて高校相撲の3大タイトルといわれる高等学校相撲金沢大会に、42年ぶり2回目の優勝を果たし、大変喜んでいいる。

今年度は、海洋高校への改称の20年目に当たり、体育祭をさらに充実させ、16日(土)に一般公開で開催するため、同窓会総会の日程につきましてはご迷惑をお掛けしました。

能生水産高校・海洋高校114年の歴史と伝統を汚さぬよう一生懸命努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

3 資格確認をし、物故者に黙祷をおこない、議長選出

を行った。議長には、能生支部長S17A猪又芳夫氏が選出された。また、議事録署名人には議長の他、理事のS11B富田達治氏、理事のS11B岡崎辰三氏が選出され議事に入った。

4 議 事

(1) 議案第1号 社員（代議員）の選出について（定款第5条第2項）

定款第5条第2項では正社員による代議員選挙によって選出され、120名から150名以内とすることになっている。各支部より連絡があり代議員に選出された方、社団法人に登記されている理事以外の理事及び代議員の方には、引き続き社員として名簿にあげさせていただいた。亡くなられた方、退会を希望された方、返事かなかった方は除いてある。ただし、15名の社員の名簿が確定していない。15名の推薦名簿が出てきていないので、138名であるが、あと15名が追加される予定である。

○質問や意義なく、議案第1号は承認された。

(2) 議案第2号 理事、監事の選出について（定款第12条及び第25条第2号）

定款第12条第1項及び第25条第2号では、理事及び監事は社員総会決議によって選任される。定款第12条第2項では、会長及び副会長は理事会の決議によって理事の中から選出される。

平成24年4月1日から一般社団法人としての理事・監事は旧法人の方になって頂いているが、任期は本総会が終わるまでである。

新理事は、平成26年の総会まで、監事は平成28年の総会までが任期となる。

議案第2号が決議されたら、新理事は場所を変え会長及び副会長を選出していただく。

○質問や意義なく、議案第2号は承認された。

議案第2号が終了したところで、休憩とした。

その間、別室にて理事会を行い、会長・副会長の選出を行った。

議事再開前に理事会議長を務めた富田達治氏より、理事会の結果が報告され、新会長にS16B岩崎昇氏、新副会長にS16A伊藤常男氏が決定し、S16A楠田法温氏、S18F伊藤清正氏は副会長に再任された。

(3) 議案第3号 支部長の選出について（定款第25条第3号）

定款第25条第3号では、支部長の選任解任は社員総会で決議する。亡くなられた方や体調が悪い方を除き提案させていただいた。

○長野支部 S7F井川弘氏から、山本長野支部長より出席者も少ない等から、長野支部をしばらく休支部

にして欲しいという電話があったとの報告があった。
○長野支部は休支部として扱うことに、報告等については継続し、S7F井川弘氏のところへ送ることとした。

○質問や意義なく、議案第3号は承認された。

(4) 議案第4号 平成23年度貸借対照表及び損益計算書の承認について（定款第25条第4号及び第34条第項）

事務局より、平成23年度事業について、説明、報告がなされ、続いて五十嵐会計より収支計算書、貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録等及び東日本大震災義援金収支計算書、鳴雛寮決算書、損益計算書及び貸借対照表の説明をおこなった。続いて五味川監事より、平成23年度社団法人能水会の決算書及び、平成23年度鳴雛寮会計決算書について、正常との監査報告があった。

○五十嵐会計より、6月9日現在、新潟、名立、長野支部から平成24年度年会費をいただいていると報告があった。

○S16A楠田法温氏より、東日本大震災義援金収支計算書で、次期繰越金が221,055円あるが、どうするのかという質問があった。

○事務局から、教育活動支援制度の基本金という話があるが、後ほど議題にあるので、そこで検討したいと回答があった。

○五十嵐会計より、東日本大震災義援金収支計算書の次期繰越金、221,055円を事業費として計上してはと考えたが、事務局と相談し別会計とした。

報告事項 平成24年度事業計画書

事務局より、平成24年度事業計画書について説明、報告がなされた。

五十嵐会計より、平成24年度一般社団法人能水会事業計画、平成24年度一般社団法人能水会予算書、平成24年度一般社団法人収支予算書、平成24年度鳴雛寮予算書について、説明、報告がなされた。

○5月30日に行われ理事会の折、予算書の様式が一般法人に適していないのではないかと、第1回目の一般社団法人の予算書に前年度予算が載るのはおかしいのではないかと質問があった。県教育委員会に問い合わせたところ、特に義務付けられている会計基準はなく、平成16年改正基準でも構わないとのことであった。また、前年度社団法人の予算額が載っていても法律違反にはならない。載せている法人は半々だそうである。

○質問や意義なく、議案第4号は承認された。

(5) 議案第5号 定款変更について（定款第25条第5号及び第30条第2項第3号）

税務署へ一般社団法人の手続きに行ったところ今の

定款では税制上の優遇措置は受けられないとの指摘を受けた。本法人のような非営利型法人の要件を満たすには、余剰金（利益）の分配を行わないこと、解散したときは、残余財産を国や一定の公益的な団体に贈与することを定款に定めることと指摘を受けた。

第34条（事業報告及び決算）の第4項に、「この法人は、余剰金を分配することはできない。」と加え39条（解散）の第2項に、「この法人が、精算する場合において有する残余財産は、国・地方公公共団体に贈与するものとする。」を加えることにした。

○質問や意義なく、議案第5号は承認された。

(6) 議案第6号 教育活動支援制度について

目的は4つある。1つ目は、産業教育及び学校のPR支援及び生徒募集支援。専門高校と呼ばれている学校が普通科志向のあおりを受け定員割れを起し厳しい状況に追い込まれ、専門高校としての運営が行き詰まってきている。素晴らしい専門教育が日本から衰退してしまうことは非常に残念である。この制度を使い、少しでもお役に立ちたいと考えた。

2つ目は、クラブ活動や大会支援、研究活動や発表大会支援である。専門高校には一流にクラブやその大会が行われている。また、専門的な教育の中から素晴らしい実践的な研究が行われ発表大会が行われている。しかし、専門ゆえにマイナーなものが多いのが現状である。それを一般に知らしめ、専門高校が生活に密着しているものであることを伝えるお手伝いのできるのではないかと考えた。

3つ目は、就学困難な生徒への奨学支援である。現在、授業料は免除されているが、苦しい日本経済を考えると、将来にわたり継続される制度であると保証が出来ない状況である。また、授業料免除の状況においても生徒会費や修学旅行費、PTA会費が払えない家庭がある。近年、離婚が増加し、母子家庭や父子家庭も増えている。このような状況を踏まえ、この制度により修学できる環境支援を行いたいと考えた。

4つ目は、優れた能力を持つ生徒を支援する育英支援である。優れた能力に恵まれているが、家庭環境によりその能力を伸ばすことが出来ない生徒を支援し、少しでもすぐれた生徒を社会に輩出する支援ができないかと考えた。

募金計画については、会報日本海を利用し、全会員に対し、会費と一緒に募金をお願いしたいと考えている。今年の会報部数は54,000部。1人1,000円として、540万円になる。また、110周年記念事業時にご寄付をいただいた企業を中心に募金活動を行いたいと考えている。

前回の総会で、東京支部より示していただいた資料にあった、基本金1,500万円を目標額にするという考えである。

以降は、毎年、会報日本海を利用し、全会員に会費と同時に募金にあたる。

教育活動支援制度運営委員会の設立については、定款の事業にあり、毎年の事業になるので、委員会を設け継続的に事業を進めていく必要がある。

○質問や意義なく、議案第6号は承認された。

5 その他

○伊藤副会長より提案があった。

基盤となる地区会員の活動状況について、近隣支部で役員が来ていない支部がある。各役員体制、新しい支部づくりを見直し、新会員を増やす必要があるのではないかと。「能水会」という名称と意味を考え直すことも必要ではないか。

○19支部へ名簿を提供できないのかと、青海支部S20回 秋山健治氏から質問があった。

○少額のお金がかかるが、サラトに依頼して抽出し、提供することはできる。既に東京、新潟、能生支部には名簿を渡してあると事務局が回答した。

○会報で呼びかけているが、なかなか効果がない。返事もこない、入金もない。今回も能生支部総会に130人程案内を出しているが、まったく返答もない会員・役員もいる。能生支部においても、卒回の若い人に役員を変更していくことを考えている。また、女性会員も増やしていくと伊藤副会長から発言があった。

○岩崎新会長就任あいさつ

この度、田中前会長及び理事長の退任に伴い、選出を賜った。伝統ある能水会の発展に立派に任を果たされてきた歴代会長の後を受け、重責を担うことに不安と戸惑いがあった。お引き受けをするには、能水会の発展と親睦融和、母校の発展のために全身全霊をもって尽くす。

田中前会長をはじめ、事務局のご努力により、一般社団法人への移行申請、定款変更手続きを経て、新生能水会がスタートする。少子化による長男、長女という家族構成で、卒業後は出身地での定住型志向となっており、今後、支部活動に厳しさが増してくる。今年、72名が学舎を卒業したが、進路先は同じ傾向にある。

現実をしっかりと対峙し、支部活動の活性化策を構築していかなければならない。東京支部広域連合「1都6県」で、約1,080名の会員数を考えると、上越エリアの活性化を急がなければならない。

承認をいただいた、教育支援活動制度を通じて、産業教育を支える高等教育を、一般社団法人能水会として、母校を支援し、OB会として機能を発揮していきたい。

今回、留任された伊藤清正副会長、楠田副会長、新たに選出された伊藤常男副会長と共によろしくお申し上げます。

田中前会長、お疲れ様でした。これからもご指導をお願い申し上げます。日頃からご苦勞をおかけしている、

本日参会の皆様、本部事務局の更なるご尽力をいただき、執行部一丸となって推進していきたい。

○田中会長退任のあいさつ

平成18年から3年間副会長を、平成21年から3年間会長を務めさせていただいた。その間の思い出といえば、平成20年に110周年記念事業を、副実行委員長として、多くの方々のご協力をいただき、無事にできたことである。会費増収を図るため、広報発送時に郵便振替を同封した。その結果、1,000名を超える方々より会費を納めていただき、大変ありがたかった。

新法人への移行作業を始めてから、足かけ5年。一般社団法人への移行申請、定款変更手続きが終わり、新生能水会がスタートする。その間、多くの方々にご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

高齢化が進む中で、支部活動の停滞化が心配である。能水会を活性化させるために、新しい会員、女性会員の参加を増やしていくことを考えている。

長い間、ありがとうございました。

○田中会長へ感謝状贈呈

岩崎新会長より感謝状が贈呈された。

○本総会の議事はすべて承認され、閉会した。

総会終了後、体育館に集まり記念写真を撮った。その後12時30分より能生駅前汐路において懇親会が行われ先輩後輩が杯を酌み交わし、能水会の展望を語り、最後は恒例の校歌応援歌の合唱で終了した。



社団法人 能水会 本部会計

貸借対照表

平成24年 3月31日現在

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
普通預金	812,258	1,142,769	▲ 330,511
定期預金	4,376,477	4,373,854	2,623
未収入金	120,000	120,000	0
流動資産合計	5,308,735	5,636,623	▲ 327,888
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
土地	274,413	274,413	0
基本財産合計	274,413	274,413	0
(2) 特定資産			
特定資産合計	0	0	0
(3) その他固定資産			
その他固定資産合計	0	0	0
固定資産合計	274,413	274,413	0
資産合計	5,583,148	5,911,036	▲ 327,888
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	120,000	120,000	0
未払費用	5,225	0	5,225
納税引当金	70,000	70,000	0
流動負債合計	195,225	190,000	5,225
2. 固定負債			
固定負債合計	0	0	0
負債合計	195,225	190,000	5,225
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計			0
(うち基本財産への充当額)	()	()	(0)
(うち特定資産への充当額)	()	()	(0)
2. 一般正味財産			
一般正味財産合計	5,387,923	5,721,036	▲ 333,113
(うち基本財産への充当額)	()	()	(0)
(うち特定資産への充当額)	()	()	(0)
正味財産合計	5,387,923	5,721,036	▲ 333,113
負債及び正味財産合計	5,583,148	5,911,036	▲ 327,888

平成24年度
7月27日(金) 体験入学

出張学校説明会

●民間地区 / ながおか市民センター 2F 会議室
8月25日(日) 13:30~15:30

●新潟地区 / 県立生涯学習推進センター 2F 大研修室
8月26日(月) 13:30~15:30

学校見学
海洋高校ホームページで常時受付中!!

詳しくは
お問い合わせください
新潟県立海洋高等学校

GO Wagaモノよ、
海に乗り出せ!

AHEAD!

コブダイ
大きいコブダイを捕まると、
その肉は新鮮でおいしいと評判です。
2011年、宇津川産コブダイ
が食料品として選ばれる

新潟県立
海洋高等学校

<http://www.kaiyou-h.nein.ed.jp/>
〒949-1352 新潟県糸魚川市大字能生3040 TEL.025-566-3155

産業教育活動支援制度基金のお願い

一昨年、東京支部より提案されていた奨学育英基金制度につきましては、昨年の能水会定例総会において正式提案され全会一致の賛同により発足したわけではありますが、昨年の東日本大震災に伴う会員の義援金こそ急務との判断により、こちらを優先しました。

多くの浄財を頂き誠に有難う御座いました。

さて、本会では4月1日より一般社団法人へ移行し定款変更も済ませ、更なる発展へと道を開いております。本会の目的及び事業は「産業教育の振興に寄与することを目的とする」であり6項目の事業を定め、その(3)に「産業教育高等学校生徒への教育活動支援制度の運営」を謳っております。

これは、少子化、母校受験生の恒常化した定員割れ、厳しい社会情勢、景況の悪化等により、学びたくとも学べない、恵まれない教育環境下にある優秀な生徒達が安心して学べる特色のある学校づくりを「能水会」として支援したい。母校の後輩達が、やがて日本の産業を支える有為な人材に育つことを支援したい、ということ趣旨とします。これこそ、母校の発展を第一義とする「能水会」ならばの制度であります。

産業教育活動支援制度基金設立の概要(目的)

- 1 就学困難な生徒への奨学支援。
- 2 優れた能力を持つ生徒を支援する育英支援。
- 3 産業教育及び学校のPR支援及び生徒募集支援。
- 4 クラブ活動や大会支援、研究活動や発表大会支援。

募金計画

会員：会報「日本海」同封の振込み用紙を活用し資金をお願いします。

法人・企業・個人事業主：周年事業時に、ご寄付を頂いた企業を中心に資金をお願いします。

産業教育活動支援制度運営委員会の設立

- ・委員会相談役(能水会顧問) 山崎光雄
- ・委員会相談役(能水会顧問) 田中 勉
- ・実行委員長(能水会会長) 岩崎 昇

この事業は毎年の事業になるので委員会を設け継続的に進めていきます。従って上記3名の皆さんを中心に10名で運営委員会を結成し厳正に運営していきます。

皆さん母校発展にご協力ください。



食品科学



栽培技術



海洋生産



マリン技術



海洋工学

学校紹介のパンフから

先人の歩み

北の大地で日本の水産業発展に尽力す

第1回生 阿部 三郎

水産の雄として活躍する我が校は今年創立114年を迎える。その間教育機関として幾多の変遷があったが一万人のほからは其の校訓に教える「質実剛健・進取力行・水産報国」の精神と共に、打って一丸能水魂として校門を出づるや、越後人特有な粘り強さと不撓不屈の精神で我が国の産業発展に貢献した。時代の流れは、ややもすると其の精神が薄れがちになるが、海洋国家としての日本の発展は、我が校輩出数多くの先輩諸兄の生き様を見ることにより検証できる。

今回は第1回製造科卒業の「阿部三郎」さんにスポットを当てる。氏の産業人としての人生哲学は凡夫たる我々に生きる指針を与えてくれるものである。

プロフィール

明治23年10月30日、高田市南五ノ辻（現西城町4丁目）に生まれる。明治39年4月16日、能生の伯母田近エンさんの養子となって入学。明治42年3月27日卒業。同期の卒業生は15名（漁撈科4名、製造科9名、養殖科2名）。当時の教授科目は、修身・国語・数学・地理・物理・化学・博物・外国語・図書・体操・法制経済・気象・航海運用・漁撈・製造・養殖・実習等の科目を学び寮生活を送られたようであった。氏の足跡・功績は昔の「日本海」に記されているが、昭和55年に発行された「日本海」旧制31回養殖科卒の矢澤龍藏氏（糸魚川市島道在住）の記事によってもその人となりを見ることが出来る。

昭和10年発行「日本海 22号」より（阿部氏45歳）

貧窮の家より出でて力闘大会社の部長に……阿部三郎君

小樽港埠頭に社旗翻々と掲げる白亜高層の建築物がある。それは北洋産業の大動脈たる日魯漁業会社傍系の北海製罐倉庫株式会社である。同社が北門の前進要地に年産一億五千萬罐を越ゆる東洋屈指の一大会社となるまでには、幾多の尊い血と汗とで織りなされた苦闘の大絵巻そのものでありませうが、ここに同社製造部長として立つ我が阿部三郎君の事蹟は、又没することの出来ないものがある。

御維新以来一入寂れた越後高田府中の高城村に生まれた君は、戦後我国の産業経済の膨張に連れ、目覚しい発



90歳当時の阿部先生

展を為しつつある実業界へと志を樹てたものの、傾きつつある生家の窮状と燃るが如き向学心とのジレンマに陥って、小さな胸を悩ましたことであつたらう。

未だ官史、軍人を羨む明治の末期、小学校友達は何れも中学校へと進む中に君は伯母の扶けを得て、当時世間の人々に余り認識されなかつた水産学校を志願した。入学以来3カ年越後西濱の一漁村能生で苦学に等しいまでの切り詰めた生活に甘んじて勉強した。

卒業後の旺盛なる勉学（18～20歳）

明治42年卒業後は地元池田缶詰所に入り母校と連絡を取り専ら缶詰技術の研究に没頭した。蠟燭お細い光の下で夜を徹して、こつこつと鍛冶仕事もし、自炊の夕食を午後11時に済ませて洋燈の芯がジリジリと油が切れて音を立てる夜明け近くまで辞書と首引で外国書を漁った斯うした努力が君の今日ある素地培って居たのである。

社長の抜擢を受けた彼の紅涙史（20歳）

明治44年、故堤静六氏にその非凡の技術を認められ懇望されて同氏経営のカムチャッカ工場に勤務することになった。スタノボヲ山脈は永遠に溶けぬ白雪に覆われオホーツクの蒼洋は尽きぬ海の幸を包むカムチャッカの春は燃える鐵意の君にも氷河の流れは冷たく幾多試練の関所が在った。何事にも真摯な努力家である君は鋸も執れば鋸も持ち、工場の改築改善、治水工事、工場用水路の開鑿、切入に至るまで多くの人夫と共に働いた。毎夜、設計や企画の仕事のため、荒れた工場の片隅の机に向つて朝日を迎へるといふ努力振りであつた。

今日彼の地に渡る人は見るであろう、世界の鮭鱒缶詰工場のオゼルナヤ工場は君をパイロットとして、血の滲むような苦難の汗で築かれたのである。後年、堤のドル箱とも称せられ、年十数万の純益を挙げたこの大工場大漁場の陰には隠れた君の幾多の紅涙史が織り込まれているのである。

兎角安逸に流れ、漁期間の稼ぎ高を一夜で紅燈の青楼で湯水のように費ひ果たす輩の多い群に伍して、寸暇も怠らず専心斯業のため勉強することを忘れなかつた。ある時は母校に、ある時は陸軍糧秣廠に実習し、研究を重ね思う存分腕を磨いた。

無名の助手が一躍工務主任に（22～25歳）

大正2年、堤商会では我国初めての自動製罐並びに缶詰機械をオゼルナヤ工場に新設した時、米国人技師に従い唯一人の邦人助手として協力完成し、其の手腕技術は大いに外人技師に認められ、ミスター・アベは立派な日本の製罐技術家として、将来大いに為すであらうと折紙をつけられた程であつた。

それかあらぬか大正5年9月、東京の水産講習所で自動製罐機械を輸入新設する時、其の備付け担当者として白羽の矢を立てられた。素より責任感の強い君は日夜精

根を込めて、見事この工事を完成せしめたのである。彼の複雑な新式の舶来機械が何で名もない日本の一青年の手で出来るものではないと疑っていた世間を驚かし益々君の腕の冴えが認められてきた。

米国へ業務視察の為派せらる (26~28歳)

翌6年4月、一躍オゼルナヤ工場の工務主任に抜擢されたが、2カ年後の28歳の時、同工場の工場長に栄進した。その年の9月、カムチャッカを引揚げてから先進国の米国へ食料缶詰や一般工場視察に旅立つた。ロスアンゼルスを振出しに各地の缶詰工場は勿論、機械に接する者としては是非鋳業から製鐵その他鐵工各部門をよく知らねばならぬというので、各地を巡り歩き技術上、経営管理上について先鋭なる君の観察眼は幾多の有益なることをキャッチして翌春に帰朝した。

缶詰機械部の改善施設 (29歳~)

帰朝後は彼の地の長所を採り所謂日本式米国経営法を採用し、技術上に於いても従来の研究に拍車をかけ、種々多方面に向って進められ、製鋼、燃料、機構につき鋭意研究を重ね、鐵工部を起し研究機関を組織して着々事業を拡張した。今日世界市場に飛躍する北洋の鮭鱒缶詰も創造時代を脱けきらないその頃には他人の知らない苦勞が多かった。然し、不斷の努力を以て事に当る君は如何なる難問も突破し、血と汗で築かれた尊い体験と研究とによって逐年優良品が生産され、他の工場の人々までも色々と教を乞ふのであった。温厚な君は一々手をとって苦心の跡も忘れたかのように朗らかに教へるのであった。そうして又次の研究に向って絶えず精根を打込んだ。

特殊製鋼方の案出

母国を距る数千里の工場では常に機械の部分品等に悩まされたが、特殊製鋼法の案出により従来至難であった機械部分品のロール、ロールピン及びチャック、又は高速度打抜型の磨滅防止に成功し、輸入品のスペース、パートを死蔵せねばならない当時の各工場に一大福音を与え、一面舶来品に優る製品を得て逐次輸入を防止するの氣運に向はせた。又、デイゼル或はセミデイゼル機関に軽重油の代用品として魚油使用の可能を発表し、全国に先駆けてミーキン式フィッシュミール自動機械を据付け、魚糧の製造を開始しその利用策を講じたのであるが、おそらく日本人として最初のものであろう。

身を以て漁夫を導く慈愛 (30~38歳)

大正10年堤商會が日魯漁業会社と合併した時、オゼルナヤ地方部長代理工場長に栄進し、北海製罐会社と改構せられ自ら製罐主任となった。されど北洋開拓の為に捧げた君の全生命は毎年渡り鳥のように春がくれば最愛の職場カムチャッカへ多数の従業員と共に渡ることを無上

の楽しみにし、20数年間極北の生命線に活躍した。

温厚な君は荒くれた漁夫、職工、雑夫の果てまでもよく愛し色々面倒を見てやるので、彼らもカムチャッカの阿部さんとまで敬慕したとの事である。

徳を以て人を導くと言う君の信念こそ動もすれば技術や学理一点張りに流れ易い工場幹部の大いに学ばねばならぬ点であろう。工場長としての君は作業服姿で毎日工場に職工を励まし、よき話相手ともなったり、研究場に職工を指揮している甲斐々々しい姿を見る事が出来る。

今日に至るまで君の関係する工場では一度のストライキの様な煩はしい労働争議一つ起らず、模範工場となっているのも、一に君の徳と力によるものであると言っても過言ではあるまい。

昭和4年、北海製罐倉庫会社の工務課主任に専任せられるまで、毎年4月より10月初旬までカムチャッカ、10月より翌年の3月まで製罐会社に務め、空罐需要者或は空罐供給者の双方の立場に立ち、研究に研究を重ね今日の優良品を出す事が出来たのである。その間、機械の改良や新工夫は枚挙に遑のない程で、最近米国に於いてさえ毎分標準125罐の能力の巻締機械を200罐の巻締能力に増大し、国産機械製造工場に指針を示している。

現在日魯や北海製罐会社の各種の機械や製品の改良、発明、考案したるものは、殆ど君の研究に依って為し遂げられたものと言っても差支へない。

寸暇をさいて缶詰技術指導に (31~45歳)

君は営利会社の善良なる一技術家である許りでなく、冬期間北海道、樺太、東北各地より各工場の技術者を集める缶詰技術講習会の講師として、大正11年



北海製罐倉庫株式会社

以来特に十有三年間毎年3、40名の講習生を養成し、本年2月までに其の数460名の多きに達したという。

今や北洋水産缶詰工場の主脳技術者の多くは君の薫陶を受けた人々であると言われている。本邦輸出品中重きをなす北洋缶詰界の王座を行くグレート日魯と製罐界の明星北海製罐の礎を築き、今日に於いてもたゆまざる研究と努力を続ける君は、本年8月同社製造部長の要職に就いた、45歳と見えぬ元気な君に、我が水産界では将来嘱するものが多いのである。

昭和55年発行「日本海」矢澤龍藏先生(旧制31回養殖科卒)の記事から

阿部元北海製罐小樽工場長に協会表彰

缶詰製造65年一筋、日本缶詰協会から表彰される。(当時の北海道新聞は阿部三郎氏の表彰を次のように紹介している)

阿部さんは新潟県高田市出身。県立能生水産学校で、

缶詰製造を学び、明治44年（1911年）日魯漁業の前身、堤商会へ入社し、日魯カムチャッカ工場長、東洋製罐（北海製罐の前身）小樽工場長、日本農産缶詰専務などを歴任。現在は北海製罐缶詰研究所嘱託。

戦後、日本が北洋の權益を全て失って、サケ・マスの缶詰ができなくなり、それまでの膨大な空罐の需要がなくなったのが、阿部さんを畑違いの農産物の研究に手を深めさせたきっかけ。（途中省略）「私は学校で缶詰製造の原理を勉強した。医学も農学も、科学の原理はみな同じ」というのが熟練した技術者の阿部さんが到達した『極意』。「長いこと一つの仕事を続けていけばこういうこともありますよ」「表彰は皆さんのおかげ」と表彰状を手にした阿部さんは、さわやかに笑った。

後 記

母校創立70周年記念行事（昭和43年）の一つに阿部三郎先生の講演をお願いしたことがあった。小樽から列車で能生に、そして約2時間の記念講演の『はたらく』ことの意味はた（他人を）楽にすることだと極言された。

当時80歳の先生は又全国の老人ホームを巡回されては老人に勇気付けをしておられる、とも話された。

私が小樽市の清水町、小高い丘の洋館風の先生のお宅を訪問したのは8月上旬の土曜日、午後2時頃だった。先生はバスで会社から帰られたばかりの洋服を作業衣に着換えられ、颯爽と庭と農園兼バラ園に立たれたお姿は米寿を迎えるお人とは想像も出来ない程の若々しさであった。お話は矢張りご健康の秘訣から始まった。

(1) 体をいつもアルカリ性に保つこと。

先生は世界の16種類のバラをお庭狭しと咲かせ、その手入れは全てお一人でなさる。

「私の手を見なさい」……成程、大きな掌にはバラの刺の傷跡が点々と残る。この傷が化膿しない事が健康の証明なんだよと……。

(2) 玄米飯を常食すること。

原米とも書く、圧力釜でたき、よく噛んでゆっくり食事をとる。これで全ての病気を予防する体力が出来る。

白米は砂糖と同様で人間の体を酸性にする元凶だ。食品添加物も多くは白色だから健康に良くない。黒い色は健康のもと。健康色は黒い色……。

(3) 働くこと。=はたらく。

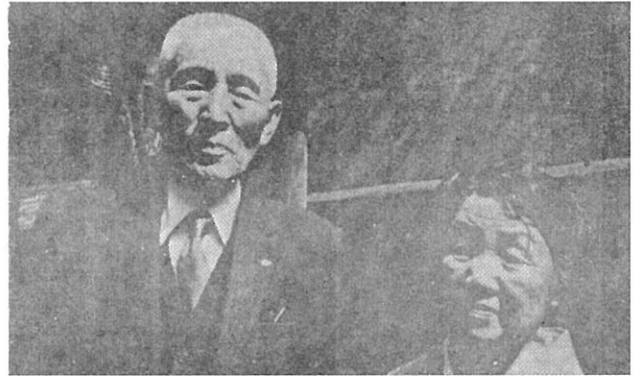
他人が仕事をし易いよう、自分が色々と工夫してやる。職場での労働条件の改善・環境作り、多くなる老人社会への奉仕活動など……。はたらく 場所には不足はない。お金の為、出世の為ではなく、奉仕する活動が精神的にも自分を健康にしてくれる。

ところで今、先生は会社でどんなお仕事を……。 「今、会社で電子顕微鏡をのぞいています」何のご研究ですか……。 「歯車の研究です」

先生は自宅からバスで会社へ通勤されるがバスの中では空席があっても腰をかけない。足腰を強くするには丁度よい運動ですよ、と若い者顔負けのご返事が返って来

る。涼しいブドウ棚の下で先生のお話をお聞きしていると夕方になって仕舞った。

内地ででも余り育たないような胡瓜が下がり、茄子が真黒い艶を陽に輝かせている。校長先生に「宜しくお伝え下さい。」バス停まで送って頂いた先生のお別れのお言葉でした。小樽市名誉市民第1号でもあられる先生のお顔が見えなくなるまで手を振って先生のご健康を祈りつづけたのであった。（文責 矢澤）



函館支会長（28～30歳）

大正9年発行「日本海 8号」によれば、阿部氏は大正8年（28歳）には北洋漁業の第一線で活躍する同窓生を束ね函館支会の会長として活躍している。

当時は日魯漁業株式会社1社だけでも函館支会の会員は31名を数えた。支会の会則を見ると、役員任期は1年で大正10年にも再選され支会長を勤めている。（ちなみに東京支会は大正7年2月11日紀元節の佳辰を期して発会式を挙げている）阿部氏はこの年の10月にはいよいよ小樽の地において創立された北海製罐倉庫株式会社に転勤となり函館を離れる。

昭和10年の函館（44～45歳）

昭和10年に函館水産高校へ赴任した吉川藤次郎氏（ペンネーム：吉川一竿）は「日本海22号」で当時の函館の様子を伝えている。

「この地に来て、何と言っても心強く感ずることは、80名を越ゆる同窓生諸兄が渾然一体となって活躍する函館支会の伸びる姿がそれだ。而も竹田会長を始め、北洋漁業の第一線で活躍され、夫々確い地位を得られて居られることは、母校が世に誇り得る最大なものであろう。

能水出の北洋進出振り、それは丁度燦然たる北斗の光か、永劫より永劫に向って、伸び行く母校のシンボルだ」として北洋活動の様子を伝えている。（筆者も昭和41～42年頃函館に入港の際は仲間達と竹田義郎氏を始め多くの先輩にお世話になりました）

吉川藤次郎氏は8年間の母校勤務後函館に転勤したが、かの地の同窓をみて「能水スピリット」を次のように表現している。

「躍進能水の姿……ここで見逃すことの出来ぬ事実は、1千人の校友各位の有機的母校中心の精神的活動であろう。

能水精神の表はれが何時の場合でも遺憾なく発揮され、私共が実際色々の仕事をやらせて頂きながら、言うに言われぬ、和やかな心から心への流れを味へた、それが誰彼を問わず、また、幾多こんな雰囲気にしたことであろう。これが「伊津野精神」なんであろう。偉大なる伊津野精神の忠義な実践者の姿こそ校友の全部に見られる頼もしい姿そのものであった。堅い母校を護る誓ひこそ伸びる能水の誇りでもあり、原動力でもあった。

この気質は何時までも何時までも続けて行きたいことだ、続けて行かなければならぬことだ。」

能水スピリット＝伊津野精神

我々は未来永劫「能水魂」のことを言い続けるであろう。その精神的拠り所は「井陵台の母校」にある。その母校を卒業したことに誇りを持ち、決して母校に恥をかかせてはならない。その一番の体現者は母校卒業の1回生「阿部三郎」さん始め15名の卒業生であることは論を待たない。

「阿部三郎」さんは23歳頃から各種の食品製造技術の研究論文や満州国の水産業の実態を「日本海」を通じて発表している。母校の生徒に対しても3回ほど講演を頂いたそうであるが筆者は「阿部先生」には一度もお会いできなかつた。今そのことを悔やまれてならない。

参考文献

能水會会報「日本海、2、5、6、8、9、22、24、」
昭和55年版日本海
北海製罐倉庫株式会社 (HP)

(文責 伊藤清正 新18回漁)

ご 挨拶

東京糸魚川会副会長 池田 忠男

能生水産高校は、私の幼少時代(昭和28年～31年)憧れの学校でした。

小中学校時代の学校帰りに友達とよ～く素足の下駄履き姿で坂を上がり、運動会の練習や相撲部の練習を見に行ったものです。運動会では応援団長の色鮮やかな羽織、袴姿の格好良さ、相撲大会では筒石出身の長崎さんの強かった姿は今でも脳裏に焼き付いております。

学生生活を終え社会人になってから、能水OB会の岩崎 昇会長、伊藤常男東京支部長との出会いがあり本年2月上野東天紅で開催されました「能水会東京支部総会・新年祝賀会」に東京糸魚川会事務局の高間と2名で出席させて頂きました。

貴、能水会の皆さんの絆の深さを改めて認識することが出来、又何十年振りかで同じ町内で幼い時代を過ごした友だちとお会いすることが出来、有意義な機会を持つことが出来感謝いたしています。

当東京糸魚川会は、糸魚川で幼少時代を過ごし学び、ふるさとを跡に残し、ふるさと糸魚川を愛する関東在住者の集いの会です。

ふるさとを思う立派な諸先輩が設立して現在会員230名程ですが、間もなく60周年を迎えようとしており、加えてふるさとに新幹線が開通(平成27年春)と、大変記念すべき時を迎えます。

これをご縁に能水会の皆様に是非東京糸魚川会へご入会いただき、共に親睦を深め、糸魚川の発展のために力を合わせる事が出来ればと考え紙面をお借りしてお願い申し上げます。

皆様のご健康、ご活躍を心より祈念申し上げご挨拶とさせていただきます。

問合せ

〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南1-44-7

TEL・Fax 03-3314-1616

東京糸魚川会事務局 高間 紀雄

海産物卸し

(有) 竹 田

- 日本の珍味 ○こだわりの商品
- 無添加商品を取り揃えています。
- ☆良い商品をお客様のお手元へお届け出来るよう、日々努力しております。
- ※是非一度、御賞味下さいませよう、御注文、お買上お待ち申し上げます。

〒949-1352 新潟県糸魚川市大字能生2893-14

電話 025-566-4986 FAX 025-566-5230

e-mail u-takeda@nou.ne.jp

URL <http://wed.nou.ne.jp/~yt-hatue/index.html>

ショッピングサイト <http://www.plaza255.com/takeda/>

代表取締役

竹田勝利

(新16増)



鷗雛寮から眺める母校と鉾ヶ岳

日頃から本校相撲部の活動に対しまして、ご支援ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

本年度の全国大会の結果につきまして、ご報告いたします。

高校相撲金沢大会団体優勝

「第96回高校相撲金沢大会」が5月27日、石川県卯辰山相撲場で行われ、前身の能生水産高校が昭和45年に制して以来（42年ぶり）、2度目の団体優勝を果たしました。この大会は100年近い伝統があり、全国の有力校72校が参加して行われる「相撲の甲子園」ともいわれる大会です。

団体戦の予選を順調に勝ち進み、34校による決勝トーナメントの3回戦では、前年優勝の鳥取城北に2-1、準決勝では高校選抜大会（高知大会）を制した埼玉栄に3-0で完勝し、決勝では金沢市立工業と対戦しました。先鋒戦で村松裕介（3年）がはたき込みで勝ち、中堅戦で松永久志（2年）が寄り切りで破れて1-1に持ち込まれましたが、三輪隼斗（3年）が大將戦を押し倒して制し、伝統の黒鷲旗を獲得することができました。

また、団体予選3回戦全勝の56選手で争われた個人決勝トーナメントには3選手とも出場しましたが、村松の8強が最高でした。会場では、保護者やOBの方々から応援をいただき、選手達の大きな力になったと思います。また、会場である石川県の金沢支部からは、毎年激励や応援をいただき、大変感謝しています。



海洋高校インターハイ個人優勝

全国高校総合体育大会（インターハイ）「北信越かがやき総体」相撲競技が長野市のエムウエーブで行われました。8月4日の個人戦決勝トーナメントでは、村松裕介が個人優勝を飾りました。決勝トーナメント準決勝で強敵イチンノロブ（鳥取城北）を寄り切りで、決勝では白石（千葉・専大松戸）をはたき込みで破りました。村松選手は平成21年、広島・竹原中学時代に全中選手権でも優勝しており、中学横綱と高校横綱の快挙を果たしました。



団体戦は、予選を佐藤（2年）、松永（2年）、高（3年）、西澤（2年）、小池（1年）の布陣で戦い3戦全勝で通過しました。しかし、5日に行われた決勝トーナメントは、先鋒に村松、大將に三輪を入れた布陣で臨みましたが、2回戦で宿敵埼玉栄に2-3で敗退してしまいました。

会場には、保護者、PTA、3年食品科学科の生徒、そして糸魚川市、東京、長野などからOBの方々が大勢応援に駆けつけていただき、100人を超える大応援団の中で選手達が試合に臨むことができましたことを、心より感謝申し上げます。大変ありがとうございました。



高校相撲十和田大会団体準優勝

「第61回選抜高校相撲十和田大会」は8月15日、青森県十和田市相撲場で行われました。団体戦は、高校総体で優勝した地元青森県の三本木農に決勝戦で敗れ、惜しくも準優勝となりました。個人戦は、村松裕介のベスト16が最高でした。

団体戦の結果は以下の通りです。

準決勝 海 洋 2-1 埼玉栄

決 勝 三本木 2-1 海 洋（村松、松永、三輪）

今回、このような好成績が残せたのは、同窓生の皆様の応援や激励があったからこそと感謝いたしております。今後も全国大会での活躍が期待されますので、ご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

東京支部総会開催

東京支部広報部

去る、2月19日、上野東天紅にて第28回社団法人能水会東京支部総会並びに第24回OB親睦新年祝賀会を開催致しました今回も100名を超す多くの方々に御参会を賜りまして盛会裏に終わらせて頂きました。

これも、4年前から東京支部が主活動の一つとして進めて参りました広域連合活動が、東京支部を始め能水会本部、近隣各支部、遠くは静岡支部、新潟支会、地元能生支部、青海支部の各会員の皆様方よりご理解ご協力を頂きました賜物と感謝申し上げます。

総会、OB親睦会の様子を報告いたします。

総会は、時代・年齢こそ違っても学んだ基本は同じ、“質実剛健・進取力行・水産報国”の校訓を参加者全員で声高らかに唱和してスタートしました。

ついで、鬼籍に入られました諸先輩、同窓の仲間黙祷をささげました。(残念なことです今年も非常に多くの方々の鬼籍入りが報告されました。)

岩崎東京支部長より挨拶があり、そのポイントは能水会は社団法人としてすでに認可されていますが、法律の改正で新たな法人格(一般社団法人)として認可を受けなければならないが、近いうちに認可されるので新たな事業活動に向けて行動を起こすとの決意表明がありました。

続いて、平成23年度事業報告、会計報告並びに監査報告、平成24年度事業計画案・収支予算案が各業務担当者より報告発表があり、承認されました。

来賓として、田中能水会会長に御挨拶を頂き、昨年の東日本大震災に対し見舞金の募金に大勢の同窓生より義捐金があり、善意を被災された同窓生を始め水産高校や関連施設に届けたのと報告と、新設された母校在校生への能水会会長賞の対象者が決まった等の報告がありました。

東京支部最高顧問で前能水会会長の山崎光雄様に御挨拶を賜り、続いて猪又学校長の御挨拶を、長年の教職の経験と思いを更にウラジオストック国立海洋大学、上海国立海洋大学との国際交流の実現に労をとられて来た旨のお話しを頂きました。

最後に、母校で教鞭をとられながら、本部事務局長を務められている渡辺先生より在校生の頑張りを含め、母校の近況報告をいただき総会は閉会となりました。

15回と回を重ねてきました、東京支部恒例の新春セミナーへと移り、今回は母校で教鞭をとられております、楨田善衛先生に講師をお願いしました。

演題は、「新潟県立海洋高校の取り組み」で少々難しそうな感じですが、その内容は、先生のスタートは農業関係からで途中から水産関係に進路変更し今に至っていること、先生の教育方針等の自己紹介に続き、今現場(食

品科学科)取り組まれている具体的なものとして、

①教育(乗船実習、製造実習、課題研究)

②研究(新製品開発=培養実習で完成した能生産の真昆布を利用した製品開発)

海藻発酵食品、能生川遡上のシロザケの有効利用

地元漁協との共同開発のメギスを利用した製品開発

生徒による学会発表

③その他

普及活動、新巻鮭の製造実習

終わりに、水産教育への提言として、教育者としてすべきこと、産業者としてすべきこと(各3ヶ条)

最後に話された、他国に資源を求めず、自国で調達し豊かな社会性をの言葉が印象に残ります。

紙面の都合で多くは書けませんが本当に多くの方々にお聴き頂きたく思った内容でした。

OB親睦会は、今年もお元気で御参会頂きました三上先生に最初に御登場をお願いし、先生としてのスタートから野中一郎校長との出会い、白山丸、井陵丸を駆ってのイカ漁、いわし漁等の思い出話を頂きました。

お年を感じさせないお元氣な田村先生からは、今日一日がハッピーだ、今を大切にとのお言葉を頂きました。

今回は、地元糸魚川市出身者で集う東京糸魚川会との友好活動として同会の池田副会長(能生小泊出身)高間事務局長(大和川出身)のお二人に御参会を賜り、池田副会長より、能水会の団結力に感動した。糸魚川と東京との連携に共に頑張りたいとの御挨拶を頂きました。

遠路駆けつけて頂きました、福地静岡県支部長、伊藤副会長(能生支部長)、本間神奈川県支部長、新潟支会から佐藤雅彦様、秋山青海支部事務局長、東京支部から高橋保司様に登壇をお願いし、高橋保司様の乾杯の音頭で宴会が開宴となりました。

席は、同期で円卓を囲む方式で、飲むほどに旧知の友との話に花が咲き、会が盛り上がりと共に各種大会で活躍されている海洋高校OBで日本体育大学の現役相撲部員が今年も駆けつけて頂き、母校相撲部で御指導されている阿部先生より各人が紹介されると、相撲部OBで法被を羽織った鈴木邦夫さん(新12回卒)山田正さん(新21回卒)が登場、お二人の相撲甚句は見事なものでした。



会も佳境に入ると、有志に登壇をお願いし、“千古不動の威を示す”まずは第一校歌を、しかし歌える人は岡野大先輩、佐藤優先生、渡辺本部事務局長の三人のみ。

続いての“満目緑の井陵に”と応援歌はとても傘寿を越えられたとは思えない声量ある元気な岡野大先輩の独唱、さらに今回は新しい趣向として、井陵台での思い出を深く探ろうと校歌・応援歌のほかに存在する、運動会のA組B組C組の各応援歌、寮歌、各科の実習歌などをご披露方々運動会での各組の応援合戦の再現ができればと、支部役員で探してみましたが、時間が足りずすべてを用意することはできませんでした。

伊藤副会長、渡辺本部事務局長の探しておられ、吉川藤次郎元教頭先生が作られたという漁撈科の実習歌が漁撈科卒業生有志により披露されまして一時のタイムスリップを楽しんでいただきました。

しかし、制約された時間は止まってくれません。最後に遠い故郷に思いを寄せ、子供の頃歌った「ふるさと」を録音ですがプロの演奏をバックに全員で合唱し閉会へと歩みを進め、主催者として丸山武紀監査役(新11卒)に謝辞を。丸山隆先輩(新5卒)に28回を数える東京支部の立ち上げに尽力された思い出話をいただきながら、次回も元気でと大々音頭を執って頂き滞りなく閉会とさせていただきます。

最後に母校在学の後輩たちが実習で造った鯖缶を手土産に会場を後にしていただきました。

このような集いを土台に、母校への応援の輪を広げていきたいと思っています。

次回は平成25年2月17日(日)上野東天紅にて開催の予定です。

尚、総会・OB親睦会には能水会の会員であればどなたでもご参加いただけます。

更に、内容のある集いへの思いで東京支部役員一同頑張ります。



東京支部総会

第3回能水会静岡支部総会報告

静岡県支部長 福地 俊 (新7回製)

平成24年6月24日(日)に、静岡市内のクーポール会館に於いて開催しました。

能水会の会員が1万人近くになるとの話を聞きましたが、それに比べ我が静岡県支部は、県全体で新会員の加入もなく会員の高齢化で会員数が年々減少して、本年現在で約73名と先細り状態です。

そんな状況下ではありますが、4年前に清水支部、沼津支部、富士宮支部、焼津支部を統合して能水会静岡県支部として再出発をして、今回で3回目を迎えました。梅雨期の開催ですので遠方より出席して下さる方もおられますので、天候が心配になりましたが、前日迄の悪天候も回復して良い天気にも恵まれ一安心しました。

ご出席頂きました方は、東京から能水会新会長岩崎昇氏、東京支部新支部長伊藤常男氏、能生から能水会事務局局長渡辺宏幸氏の出席を頂き、総員18名で開催致しました。毎回参加して下さる方々が回を重ねる度に減少するのは寂しい事ですが、今回初めてという方が焼津地区から2名あり、大変喜んでおります。新たに参加して下さる方が1人でも増えれば、希望を持つ事が出来ると思います。

今回出席された方は77歳から55歳迄で、平均年齢が70歳になりました。全国各支部の皆様は地区ではどうですか？

今回は能生から事務局長の渡辺宏幸氏が出席して頂き、若くて元気の良い方でしたので会も大変な盛り上がりで、予定の3時間があっという間に過ぎ、時間を延長して頂き盛況の内に閉会、来年の再会を約束して散会しました。



このような会合の案内状を差し上げて、様々な理由で出席出来ない方が多い中で、出席して頂ける方々は、年齢を重ねても「心」が健康な人で、元気な毎日を過ごされておられるからではないかと思います。これからも東京支部と連絡を密にして、会の運営に努力して行きたいと思っておりますので、会員皆様の御理解と御協力をお願い致します。

校歌に聴くふるさとへの想い

♪♪♪ 千古不動の威を示す 巍峨たる山をうしろにし
 ♪♪♪ 四面海もて環らせる わが帝国の大使命♪♪♪の
 大合唱が能生マリンホールに響き渡った。言わずと知れた新潟県立能生水産高等学校旧制校歌（大正10年4月制定）である。その中で声量良く音程確かな最高高齢者と思われる一人が合唱隊をリードしていた。後の人達はそのリーダーの後に続き大きな声を張り上げていた。いいよ、良いよ、だんだん良くなってきた。味わいがあるよ。指揮者の言葉に励まされ、腰も背もだんだん伸び、歌っている人達も気合いが入ってきた。……OK、OK。これは校歌録音会の一コマである。

明治初期に始まった能生地域の学校の歴史は、数回に及ぶ学制の変遷の中、現存するのは小学校5校、中学校1校、高校1校の7校になった。我々の心をついにし、その学校を誇りに歌い続けた多くの学校の校歌が気がつかないうちに消え去ろうとしている。こうした中で記録・保存をしなくては、と立ち上がったのが能生のコーラスグループ「コーラスしゃくなげ」の指導者渡辺直人さんであった。渡辺さんは能水会顧問の渡辺正三さんの子息で全国的に活躍しているオペラ歌手である。

9月4日、渡辺顧問が我が家に来て、旧制の校歌を今残しておかないとわからなくなる、録音会があるので、能生支部の旧制の人達に声を掛けようということになり、早速大先輩の皆さんに連絡した。……もう年を取りすぎてわからない、声が出ない、という人もいた。私は、新制18回の卒業であるが、能水会の会合に良く出ていたので歌うことができた。Aさん宅に行った時、もうわからないと言ったので、玄関先で「千古不動の威を示す 巍峨たる山をうしろにし」と歌った。Aさんは思い出したようだが、当日出席しなかった。旧制40回山崎正雄さんは、教員時代渡辺直人さんの担任をなさり、能生地域の校歌を保存されており、今回の企画の後ろ盾になられていた。旧制39回中村元一さんも、声のでるかなあと言いつつ仲間に声を掛けて下さった。でも人数が足りない、頼みは新制5回佐藤優会報「日本海」編集委員長である。氏も声掛けをしてくれ、総勢15名が名を連ねた。



9月11日、マリンホールには13名が集合、いよいよ録音の開始である。ステージに上がった13名は旧制34回村山常雄大先輩を先頭に3本のマイクの前に立ち歌い出した。声のでるかなあと言っていた中村先輩は、テンポがおそいなあ、音階が少しひくいなあと結構注文を出しながら大きな声で歌っていた。回を重ねる度に皆の呼吸が合い、良くなって行くのがわかる、……

OK、OK。終わった。皆大きく息をはいた。

続いて現在の校歌（昭和27年4月制定）の録音になった。今度は佐藤、岡崎、富田、伊藤、の4名がマイクの前に並び、後ろには寮生9名、左右には「コーラスしゃくなげ」の皆さん、数回でOKがでる。……これを見守っていた田中会長は、さすが現役の若者が入れば違くと絶賛し、寮生をねぎらっていた。

ちなみに約2時間ステージ上に立って歌っていた佐藤、岡崎、富田、の先輩方はステージから降りる時足がガクガクしながら降りて行った。それを後ろで見ていたのは伊藤であったが、その伊藤も同様であった。

最後に、録音途中に出た「尾山湾頭……」の歌に譜面を付けてくれるとのことで、無事録音会を終えた。

今後CD化するので、各支部での集会時には多めに活用してもらいたい。 新18回F K、I

全日制4年制課程について

武内征支郎（新9製B）

海洋高校百十四年の輝く歴史の中で、おそらく日本広しといえども当校だけに存在した、極めてユニークにして即実践的な課程があったことが学校史からも消えてしまいかねないので、憚りながら柄にもなく少し述べてみたい。

尚、小生ごときものには知らないことが多く、推測が加わるので細部においては、事実と異なる記述があるかと思うが、何分ともご容赦をお願いしたい。

終戦後、新制高校となり、当校にも定時制課程が発足し、本校と能生谷、名立分校の体制でスタートしたのである。ところが本校のほうの志願者が激減したらしく、存続が危ぶまれる事態になったらしい。廃止も検討されたらしいのだが、分校のほうは志願者がかなりいたらしく廃止の理由が成り立たない。しかし、本校がないのに分校があるのは問題があるという事態になったらしい。そこで苦肉の策として水産製造科を1クラス増やし、このクラスを本校の“名目”定時制課程として、1年のうち3ヶ月間校外実習に出ることとし、それを4年間続けるから延べ1年間現場実習に出るという科が創設され、スタートしたのが昭和28年4月である。我々はその科の晴れの？第1期生である。

もっともこの科が出来たいきさつは、後から分かったことで、募集要項にも入学時も定時制云々は一切なく昼

間授業であり、実質全日制と何ら変わらなかったのである。発足当時は第二製造科と称されたのである。

ご存知の通り、3年制各科も従来から最終学年の3年生になると、それぞれ3ヶ月間各地へ校外実習に派遣されていた。しかし、我々の科は中学校を終えたばかりの16歳の少年が全国各地の主として水産加工場へ派遣され、(地元の能生、糸魚川周辺には工場がない)学生だからという配慮も殆どなく、完全に一労働力となって、一般社員同様の仕事をしたのである。

小生の派遣先では、夕食をとって夜8時まで働くのが決して希ではなかったのである。(1学年当時)何処へ派遣された人も、たいていこんな状態だったと聞いている。中には石川県のさる缶詰会社の余りの理不尽な扱いに堪忍袋の緒が切れ、ついに他校の実習生をも誘い込みストライキを敢行し、とうとうその工場長に頭を下げさせたというH氏のような兵(つわもの)もいたのである。

このように多感な少年時代、4年間で全員4カ所、延べ1年間にわたる実社会の厳しい現実を体験したことによるその後の長い人生において、有形無形に貴重な糧となったことは間違いなく感謝している次第である。ところが、4年間に延べ1年間、校外実習というのは問題多、となつたらしい。たとえば、前述のごとく受け入れ側の学生に対する意識、配慮、万が一怪我をしても労災適用外、などなどの懸念から、発足5年ほどでこの科は廃止になり、水産製造科2クラスになったのである。現在の海洋高校の生徒にこんな話をしても、現実離れをしていて、何の感傷もないかも知れないが学校史の片隅に加えていただければ望外の幸せである。

このようにまことに個性的なクラスだったというせいでもあるまいが、学友同士の交流はことのほか活発で、還暦を過ぎたあたりから、2~3年おきに全国各地に生息?している学友を幹事として、西は四国、山陰から北海道まで7、8ヶ所でクラス会を開催している。(残念ながら参加者はだんだん減っているが……)

そこで今回は6月4~6日、陸奥は仙台で武田保君のご尽力により盛大なクラス会が開催されたのである。会場の“秋保温泉”は6世紀の発見と伝えられ、飯坂、鳴子とともに奥州三古湯のひとつで、かつて伊達家の浴館があったという由緒深い温泉である。

その宴会場での話題は少年時代、全国各地に散らばった校外実習にまつわる悲喜こもごもの思い出話を酒の肴にして、大いに盛り上がったのである。特に今回は本邦初公開のとんでもないリアルなエピソードが飛び出し、一同笑い転げたのである。内容については個人のプライバシーに関する事なので、あとは会員諸氏のご想像にお任せする。

翌日は観光タクシーにて有名な青葉城址見学。青葉城址に高々と石垣を残すこの青葉城は伊達氏62万石の居城跡である。伊達政宗公の乗馬像をバックに記念撮影。土

井晩翠の“荒城の月”碑などもあった。

二泊目は山形県境に近いという“作並温泉”である。ここも8世紀の開湯という古湯である。急峻な山が目前に迫り、清流の谷川の絶景を満喫しながらの露天風呂に、しみじみ素晴らしい学友に恵まれたと感謝できるのも、“能生水産高校”である“全日制4年制課程”が取り持つご縁が原点である。今回はどうやら2年後の喜寿を記念にやるらしい。

川柳

- ☆ 母校の名 消えて益々 クラス会
- ☆ クラス会 旧校名で 案内来る
- ☆ クラス会 旧校名の 宴会場
- ☆ クラス会 くすり飲む友 仕舞う友

俳句

- ☆ 城跡や 政宗公に 夏近し
- ☆ 緑陰や こけしが迎える 山の駅
- ☆ 県ざかい 青葉を縫って 列車入る



母校実習船「海洋丸」東京湾にお迎えして

東京支部 柳澤 貞臣 (新12製A)

♪ 尾山湾頭に星冴えて白山丸の槽上に

波路を照らす航海燈 若舟人に幸そあれ♪

旧制第16回(大正13年)水産製造科をご卒業されました故吉川藤次郎教頭先生が作られた漁労科実習歌のワンコーラスであります。

明治31年9月水産学校として設立された今の井陵台に立たれ、満天の星の下、眼下尾山に浮かぶ白山丸を眺めながら海に活躍する若者に思いを寄せた実にロマンチックな歌であります。

今年2月能水会東京支部総会において、能水会副会長伊藤清正さん、東京支部幹事長片岡尚友さん、本部事務局長渡辺宏幸さんほか数名に御登壇いただき歌っていただいた懐かしい実習歌であります。時代は変わっても海に生きる男の魂は同じと思われま。

母校が自慢できる歌として末永く受け継ぎたいものと

思っています。

さて、このたびは標記海洋丸(299トン)が去る7月6、7、8日と東京晴海埠頭着岸されました。支部と致しまして実習生、乗組員皆様の歓迎と船内見学を目的として第8代能水会会長岩崎昇さんを中心として、東京支部長伊藤常男さんと早速都内近郊のOBの方々と連絡を取り合い7月7日(土)高橋保司(新5M卒東京支部幹事)大先輩を始め、多数の同志に参集して頂きました。

専門誌日刊水産経済新聞社、みなと新聞社も早々取材に駆けつけ行動を共にしました。

久保田船長(新27F卒)始め乗組員の方々より3班に別れ船内案内をして頂きました。能生係留の越山丸は何度か見学しましたが、海洋丸はトン数こそ越山丸より小さいが搭載機器は、GPSはじめ船のナビ、自動操船機器、通信機ボタンひとつで今日の新聞が印刷される機器、冷凍・冷蔵・乾燥機、海水→真水交換機も完備され洋上の動く加工工場でありました。

船具もきちんと収納され安全確保が良く見えました。

船内各部屋のスペースも広く女子学生専用船室もあり担う先はグリーンと広がりました。

母港を出港して津軽海峡にてイカ釣り実習、函館経由で太平洋廻りで東京港着岸、この先小笠原諸島でマグロ延縄実習後、下関経由で7月21日に母港へ戻れるとのこと。

東京湾入港は初めてという事、実習生16名総責任者岩谷先生以下乗組員18名東京支部を中心とした広域支部会員40名ご丁重なる船内見学を終え世界の7つの海に飛び出す若者に夢と希望を含ませ、本部と東京支部の絆は一段と強いものを感じたのは私一人ではないと信じました。

またこの様な機会があれば同乗したお孫さんより将来のキャプテンが育まれることを思いつつ、同志一同と船上の皆様と互いに向き合い、「フレイフレー海洋!!」のエールを送り航海の安全を祈りつつ白い船を後にしました。



我らの同期会

我孫子市 丸山 武紀(新11増)

古希を過ぎた我ら新制第11回卒業生(昭和34年卒業)は漁業、製造、増殖科の垣根を越えた同期会を平成23年10月23日、越後湯沢の湯沢グランドホテルで開催しました。同期会の開催は2月下旬に開催された能生水会関東支部総会の後、有志が集まり開催場所、月日等を決めましたが、3月11日に起きた東日本大震災により、日本全国が喪に服すような暗いムードに包まれ、開催を見合わせる声も出ました。しかし、秋も深まると世の中に落ち着きが戻り、復興のためには活気が何より必要と自粛を自制する雰囲気になってきたこと、同期会は20歳代後半に開催して以来、久しく途絶えていることなどから、予定どおり同期会を開催することとしました。

我ら同期生は135名でしたが、すでに21名は鬼籍に入られています。体調不良やいろいろな事情により参加できなかった同期生のいる中で、想定を上回る44名が出席されたことは、能生水同期生の絆の固さを示すものでしょう。恩師にはクラス担任でご健在の三上先生と水澤先生さらに全クラスの体育を担当された田村先生にご招待を申し上げたところ、三上先生、水澤先生はすでに御予定があり、御出席がかなわなかったことは残念でしたが、田村先生には御快諾をいただき、相撲部の監督を歴任された相変わらずのパワフルな言動に、後ろ向きになりがちな我ら一同、大いに勇気づけられました。

出席者の中には卒業後、初めて会う人や、久しぶりに再会する人のために受付時に名札を渡し、各自胸に付けてもらいました。高校時代とは変身している容姿に面と向かっても誰だかわからず、胸に付けた名札と顔を見比べてお互いを確認すると、一瞬のうちに高校生時代にタイムスリップし、「お前」と「おれ」と呼び合い、ホテルのロビーで、はたまた湯船につかりながら和気藹々と昔話に花が咲かせました。これも同期生が持つ人の縁の不思議な魔力でしょう。

日本の高度経済成長を支え、昼夜を問わず献身してきた同士は個性ある風格と共に、人生をやり遂げたという満足感が伺われ、穏やかな風貌を漂わせているのが印象的でした。

宴会は物故者への黙祷から始まり、田村先生の昔を振り返りながらの心温まるお祝辞を頂戴したのち、宴に移りました。宴の途中で司会者が出席者の名前を読み上げ、読み上げられた当人は自席で起立して一礼するという自己挨拶を織り交ぜながら盛況に進み、最後は定番の校歌と応援歌の大合唱でお開きとなりました。

お開きになっても、会場のあちらこちらで幾つものグループが車座になって近況を語り合い、それでも足らずに部屋にもどってから酒宴が続くという、前期高齢者に仲間入りしたとは思えない、能水健児の衰えを知らぬ

パワーに頼もしさを感じました。

当日そして翌日とも小雨が降り続くあいにくの天気でしたが、朝食後は自由解散となり、故合った出席できなかった同士の健勝を祈念し、お互いの別れを惜しみながら、そして再会を約束して三々五々、それぞれの帰路につき、久しぶりの我ら同期会は無事お開きとなりました。



新制16回卒業生ミニ同期会の開催

楠田 法温 (新16製A)

私たち新制16回卒業生(昭和39年)は最近5年ほど毎年能水会本部総会に合わせて同期会を開催しております。

これは執行部や代議員が7名おり、これに県内から数名が加わり10から15名のミニ同期会を権現荘で開催しておりました。

今年も6月9日の本部総会及び懇親会終了後に14名の参加で開催されました。本部総会の役員改選でどうしたことか!! 16回卒業生から会長に岩崎昇君(東京支部)、副会長に伊藤常男君(東京支部)、と不肖楠田(新潟支会)が就任し当たり年となっております。

今年の同期会も例年のごとくきわめて和やかに懇親を深めましたが、特記事項があります。それは、2年前に本格的な同期会を開催し3年後の再会を約束し散会したこともありどうすべきか協議したところ、来年は卒業50年目に当る節目の年であり是非本格的な同期会を開催しようと決定しました。

細部については、地元の同期生を中心に今年中に詰めることになりましたが、まずは意向調査をしその結果を参考に話を進めたいと考えております。

新制16回卒業生皆さんには益過ぎにはハガキが届くと思いますがよろしくお願ひします。

是非とも盛大な同期会にしたいものです。



インターハイ優勝に向け ～能生支部応援隊の結成～

能水会 能生支部事務局長 家崎長治

能生支部の今年度事業計画の中心は相撲部インターハイ(北信越かがやき総体)の応援隊の結成であり、募集の結果14名の参加を募ることができた。8月4日早朝能生駅前よりマイクロバスにて決戦会場(長野市、エムウェーブ)に向け出発。車中では42年ぶりに優勝を果たした金沢市卯辰山での選手の気迫に負けたくないよう、目一杯の応援をして、激励と歓喜の雄叫びを上げようとボルテージが上がる中、エムウェーブに到着した。

団体戦は無敵の3連勝と順調に勝ち、決勝トーナメントに進出し、明日への期待を膨らませる中、個人戦も決勝トーナメントに突入、期待の星、村松祐介選手が順当に勝ち上がりヤマ場となったのは準決勝でした。



準決勝イチンノロブとの対戦

昨年の高校横綱(鳥取城北・イチンノロブ)と当たり上手い立会いで相手の懐に入り、一気に寄り切った相撲は正に大一番、実質的な決勝戦と言っても過言ではない横綱相撲で勝ち、決勝も落ち着いた取り口で(はたき込み)勝った瞬間、応援席は興奮に包まれバンザイの連続、新潟県で高校横綱の栄冠を手にしたのは47年ぶり、(新発田農業高:長浜=豊山)以来の快挙でありました。



村松祐介優勝の瞬間

興奮の中、会場を離れ今宵の宿泊、湯田中温泉(星川館)に到着し東京支部の4名も合流、時を忘れる程大いに盛り上がり美酒に酔い知れ、素晴らしい交流会になりました。5日、決戦の日がやってきた。今日こそは3年連続3位の雪辱を果たしてくれるだろうとの期待で胸が熱くなりました。会場には既に東京支部の応援団長、柳澤

貞臣さんも到着、各支部や能生からも続々と応援に駆けつけ応援席は満ちあふれ、団長の音頭に合わせ会場一番の素晴らしい応援を展開しました。1回戦は圧勝、問題の2回戦はまたもや宿敵（埼玉栄）に2対3で敗れ痛恨の16強で終わり、「悔しい」この雪辱は必ずや岐阜国体で果たしてくれるだろう。選手達の目から光るものが流れた、悔しだろう、でも、この涙こそ明日への誓いと、人間として生きて行く上での良き経験となろう。良く頑張った。能生水から海洋高に校名が変われど伝統の魂は受け継がれている。母校の活躍は何時になっても嬉しいものです。遠くから駆けつけてくれた会員の皆様に心から感謝を申し上げます。有難うございました。

新19回「三栄会」の思い出

さいたま市 西内 俊夫 (新19製)

海洋高校(旧能生水産高校)を卒業しました大先輩、後輩の皆さんお元気でしょうか。?

我々も60代半ば近くの年齢となりました。

この度第4回「三栄会」を去る6月2日～3日愛知県南知多町山海海岸で開催いたしました。

名古屋、糸魚川、金沢、関東(1都3県)富士在住の会員が集合しました。

今回の開催地は高2の時に校外実習をした町(内海)です。

もう一度内海へ行ってみたいと思い選んだ次第です。

内海農協内での桃缶詰工場でした。47年前になると思います。やっではいけないんですが、こっそり桃を食べたという記憶があります、工場長さんごめんなさい、もう時効ですよ。

休日は、アルバイトの女性と内海海岸で遊んだことも懐かしく思い出されました。

今年は去年より多く出席して頂きました、年々大勢の参加を期待しております。本当に楽しい2日間でした。

後何回開催できるのかと不安もありますが、次回は平成25年能生町で開催する予定です。是非海洋高校を見学したいと思っています。

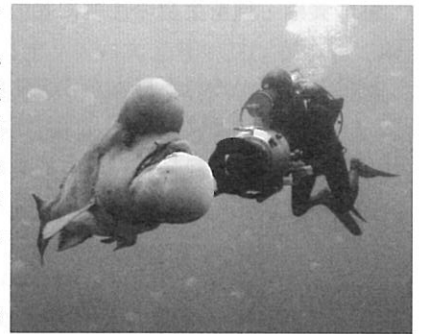
一人でも多くの参加を念願しております。“お体を大切に”また逢う日まで。



Narwhal

奥村 康 (新34増)

生来、海と生き物が好きだった私は高校進学時に能生水産高等学校増殖科を選択しました。海の傍らで生物を学べるという環境が堪らなく魅力的に思えたのです。



佐渡のコブダイ

実際入学後は海洋部(端艇部)に在籍して毎日のように海に練り出し、学校ではニジマスの孵化仔魚育成実習などを堪能しました。(学業に対し不謹慎ですが、私にとっては正に堪能だったのです……)

大学進学後にフィールド志向がより強まり、卒業後も現場に出られる職種をとの思いから海洋生物を撮影する会社に就職し、現在各国の海で魅力的な生き物たちと接する日々を送っております。

中でも、カナダの北極圏で行ったイッカクの撮影は印象深いものでした。バフィン島のアークティックベイからスノーモービルに牽引されたソリに機材を満載し、結氷した海の上を16時間ほどかけてフローエッジと呼ばれる氷の縁に到着、氷の上にテントを張って2ヶ月半イヌイットと行動を共にしたのですが、食事はアザラシトナカイ、アークティックチャー(イワナ属の一種)が中心で、朝起きると先ずは冰山由来の氷を削り取り、キャンピングストーブで溶かしてインスタントコーヒーを入れることから始まります。

撮影期間は夏季でしたので気温はそれほど下がっていませんでしたが、それでもブリザードが吹くと -30°C 位になり、用をたしにテントの外に出るのにも一大決心が必要になります。そして、海水温は -2°C 。北海道知床の流水下の水温と変わりませんが、これは -2°C 以下になると海水が塩分を排出しながら凝固しだす為それ以下の海水は存在しないからです。

そんな海に潜ると20分を過ぎた頃から指先の感覚が失われ始め、カメラの操作も困難になります。タンク内の空気を呼吸するためのレギュレーターは減圧に伴う温度低下に触発されてファーストステージという部分に直径10cm程の氷が出来上がります。

浮上後は自分でフィンを脱ぐ事も出来ない程に全身が冷え切っていますが、イッカクやシロイルカなどの北極圏特有の生き物が撮影できた時にはそんな苦痛も忘れるほど充実した気分になることができました。

現在の私は本来の水産とは違う分野にいますが、海や生き物の魅力や重要性を広く伝えることが能生水産高等学校で学んだ自分の使命ではないかと考えています。

鮎のはなし

愛知県田原市 澁谷 朋宏 (海15栽培)

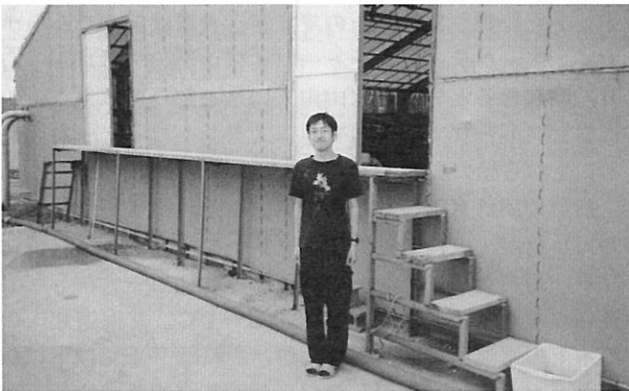
鮎の養殖・種苗生産の仕事に就いて今年で6年目になる。

鮎は言わずと知れた日本を代表する淡水魚の一種である。人々が鮎と慣れ親しんだ歴史は古く、「友釣り」は300年程前から行われているという記載もある。鮎という魚自体が一つの文化となっていると考えても良いだろう。

さて、そんな鮎だが非常に奥深い魚でもある。まず、生活史だが、平安時代の辞書「和名抄」によると「春生じ、夏長じ、秋衰え、冬死す、故に年魚と名づく」とある。秋に河口付近で産卵された卵は2週間程で孵化し、海へと流下する。海で動物プランクトンを捕食して成長した稚鮎は春、川を遡る。そして食性を植物食に変え、さらに成長する。やがて、秋を迎えると川を下り、産卵し、一生を終える。通し回遊をする魚の中の両側回遊魚である。

海を利用しない陸封型、すなわち琵琶湖産鮎の存在も面白い。湖産鮎は海産鮎にとっての「海」を琵琶湖に見立てたような生活様式で、琵琶湖に下り、流入河川に遡るスタイルをとる。その起源は約10万年前とも考えられており、海産鮎とかなり遠い類縁関係であるが、当然同種であるため、これらは交配できる。

湖産鮎は形態や鱗の数も海産と異なり、縄張り意識が強いという特徴をもっている。



そんな琵琶湖産鮎がはじめて河川に放流されたのが1913年。石川千代松博士が琵琶湖に生息する小さな「コアコ」を多摩川へ放流したところ見事大きく育ち、その後、全国に放流されるようになった。

現在、内水面の環境変化に伴う資源減少によって、放流事業無しには河川の鮎をなかなか維持できないのが現状である。ゆえに、湖産鮎をはじめ、人工種苗鮎（これは親魚が海産なら海産系、湖産なら湖産系になる）が数多く放流されている。

しかし最近になって、もともと起源を10万年前にさかのぼる湖産鮎や、その河川由来でない魚を異所へ放流することは生物多様性の低下につながる可能性があるという指摘もある。

このような問題点が挙げられる中で、自分は鮎の養殖をしている。果たして今行っていることは善行か悪行か？そんなことを考えることもある。

しかし、根底にあるのは「魚が好き」「豊かな河川を守りたい」という気持ちであることに間違いは無い。そして、飼育管理者の喜びや面白さは池内で健康な魚を育てることの他ならない。

この気持ちを大切に、「水産」にとって今後どのような方向性がベストかを模索しながら「水産報国」を目指していきたいと思う。

私が育った海洋高校

生徒会長 高木 雅

私は、平成22年にこの海洋高校に入学しました。きっかけは、小さい頃から漁業関係の仕事に就きたいと思っており、その基礎を学ぶことが出来る学校への入学を強く希望していたからです。期待に胸が膨らんで入学して来ましたが、村上から能生に来た私にとって友人が出来るかどうか不安に思うこともありました。そんな心配をよそに、寮生活とうこともあり入学してすぐ仲間がたくさんできました。

入学後の授業は期待通り楽しくて、海洋高校に入学してとても良かったと感じています。入学した頃からの思い返してみると、1年生では基礎学力を身につけるための勉強をしました。2年生になり、海洋生産コースを選びました。このコースは40日間という長い期間の航海があります。能生水産時代は、3ヶ月航海があったと聞いていますし、寮での集団生活で団体行動は慣れている私にとっては、40日航海はたいしたことないと思っていました。

ところが、実際参加してみると、最初の1週間でギブアップしそうでした。しかし、漁師を目指す私はここで諦めたらだめだと思い、必死の思いで耐え抜きました。航海中に、イカ釣り実習やマグロの延縄実習で多くのことを学ぶ事ができました。3年生では、ロシア航海がありました。言葉の壁がありながらも

ジェスチャーを交えて交流ができました。

この3年間で私は、水産高校ならではの事をたくさん学ぶ事ができました。入学したときの期待以上のものを達成する事ができたと思います。私は、この海洋高校に入学して本当に良かったと思います。最後に、3年間面倒をみてくれた海洋高校に心から感謝致します。これからは海洋高校が益々の発展し、歴史と伝統が受け継がれていくことを期待しています。

第15回全国水産・海洋高等学校ダイビング 技能コンテスト結果報告

新潟県立海洋高等学校ダイビング同好会顧問
渡 辺 宏 幸 (新30回漁業)

平成24年8月21・22日本校潜水実習プールにおいて、第15回全国水産・海洋高等学校ダイビング技能コンテストが開催され、全国より本校を含め12校、男子18チーム、女子7チームの50名の参加がありました。本校からはダイビング同好会より、男子Aチーム高木雅貴(3Mp) 林哲司(2Tm)、男子Bチーム佐藤秀(2Mc) 石原樹(1T)、女子チーム笹川佳乃子(2Tm) 松沢奈央(1C)の3チームが出場しました。

昨年度より同好会として活動を行い、早い時期より練習を行いましたが、女子の部員が笹川1名で7月の終わりにやっと松沢が加わってくれた事、8月に入り主力選手の3年生が左膝の半月板損傷で欠場し、チーム編成を再度組み直さないといけなかった事などがあり、地元開催のプレッシャーと相まって苦しい中での開催となりました。

競技は5種目行われ、その総合得点で男女の順位が決まり、男女の合計得点で総合優勝が決まります。1日目は4種目行われ、勝負の大半が決まってしまう大切な日です。

1種目目は200mフリッパーリレーです。この競技は3点セットを装着し、1人100m泳ぎ速さを競うリレー競技です。

2種目目はスクーバ器材セッティング技能です。この競技は器材の組立をあらかじめ設けられたチェックポイントを確認しながら手順や動作の正確さを競い自己申告タイムを目標として終了することを競う競技です。

3種目目はダイビングレスキューです。ダイビングはバディシステム(2人1組)が基本です。この競技は自分のバディに何らかのアクシデントがあった場合を想定し、救助する手順・動作の正確さ・速さを競う競技です。

4種目目は中性浮力コントロールテクニックです。水中では常に中性浮力の状態を維持しなければなりません。この競技は、水深5mに1辺が120cmの正方形のリングが設置されています。そのリング内で手と足を使用せず、呼吸のみで浮力調整する競技です。

1日目が終わり男子Aチームはセッティングで1位、中性浮力で1位(新記録)、女子チームはレスキューで1位、中性浮力で1位という想像以上の結果を出していましたが、他の種目ではミスがあり痛い減点をもらうケースがありました。特に男子のレスキューでは反則により失格となりレスキューでは最下位になってしまいました。しかし、男女とも中性浮力では、会場内がうなるほどの競技を見せてくれ、他校の先生方から、さすが新潟

海洋は凄いと驚かれておりました。1日目が終わり得点差で男子が前年度優勝校の三谷水産に負けており、明日の競技しだい総合優勝の行方が全く見えない状況でした。生徒も勝ちたい気持ちと明日の競技への不安でゆくりと眠る事は出来なかったと思います。

2日目は5種目のオクトパスブリージングからです。この競技は自分の器材が水中で何らかの原因で故障し、バディとともに水面に浮上することを想定した競技です。この競技では男子Aチームも女子チームも記録が振るわずかなり落ち込んでいましたが、男子Bチームが1位をとり一死を報ってくれました。

得点集計は私の仕事でしたので心臓があおり、胃がキリキリと痛む中集計が進んで行きました。しかし、その結果は暗いトンネルから抜け出たように徐々に心に光が差し込んでくるような感覚でした。気持ちを落ち着かせ何回も確認し本校の4年振りの総合優勝を確信しました。

大会を運営するにあたり同窓会より多額のご支援を頂いておりますが、良い報告が出来胸をなで下ろしているところです。今後とも生徒の活躍の場を与えて頂きますようお願い申し上げます、簡単ですが大会報告とさせていただきます。



左より男子Bチーム石原樹(1T) 佐藤秀(2Mc)
男子Aチーム林哲司(2Tm) 高木雅貴(3Mp)
女子チーム笹川佳乃子(2Tm) 松沢奈央(1C)

TOCHIN



パパの晩酌
お子様のおやつに!!

東京ちん味食品株式会社

代表取締役社長 関澤 年男 (新10製)

本社 〒264-0028 千葉県若葉区桜木3丁目22番12号
TEL: 043-232-3232(代) FAX: 043-232-5106
E-mail: info@tochin.co.jp
http://www.tochin.co.jp

東日本大震災復興支援・気仙沼漁船、 タンク引き揚げ作業

新潟市 石川 慎吾 (海12マリ)

私は深田サルベージ建設で潜水士をしています。普段の仕事は主に海難救助、大型起重機船による橋掛け等の仕事に従事しています。最近の大型工事は東京ゲートブリッジの架設工事にも行っていました。日々危険と隣り合わせで仕事しているのですが、大きな仕事が終わったときの達成感を実際に経験しないと分からないと思います。そんな私が一番苦勞し、印象に残ったのが去年起きた東日本大震災の現場でした。

私はあの3月11日、茨城県的那珂川というところで橋掛けの仕事をしていました。仕事をしている最中、大きな揺れが私たちの起重機船を揺らしました。水の上に浮いている船の上でも振動はすごく、最初は震源地が茨城かな?と思いました。

そして、揺れがおさまって仕事を再開し、その40分後でした。川下から白波が立ち上がってきます。私が最初に気付いたのですが、一瞬何が起きているのかわかりませんでした。

普段は波なんか立つことのない川の下流からものすごい勢いでこっちに迫ってきます。川の途中にあるプレジャーボートがどンドン丘に投げ飛ばされていきました。その数秒後には自分達の目の前まできました。頑丈に縛ってあった船のロープは全部切れそのまま流されてしまいました。津波と引き波で船は行ったり来たりし、結局丘に上がったのは夜の11時でした。

それから5日は茨城にいましたが、福島第一原発の爆発もあり、一端基地である横須賀に帰りました。

それから一か月もたたないうちに気仙沼の復興工事が始まりました。

行く前は、不安でしょうがありませんでした。現地の様子はどうか?

現地の人達はどんな心境なのか等々。しかし出発前日、現地の人達の為に精一杯頑張ろう。と覚悟を決め、出発しました。

しかし、現場は想像以上でした。言葉が出てこなく、本当にここは日本なのかというくらいの酷さでした。現場での工期は約二か月の予定で始まりました。宿泊施設もまだないので、船での寝泊りとなりました。

今回のサルベージは合計30人くらいでの仕事となり、3チームに分かれて仕事となりました。

Aチーム 沈没船引き揚げ準備

Bチーム 座礁船曳き降ろし

Cチーム 陸上に上がっている漁船の油抜き作業という振り分けでスタートしました。

私はBチームに配属となり、座礁船を曳き降ろす為の船の船長を任命されました。

朝から始まり夜暗くなっても作業をする時もありまし

た。船長とゆうのはもの凄いプレッシャーで、瓦礫が海のあちらこちらに浮かんでいたり、最初の頃は家が軒丸ごと浮かんでおり言葉にならないくらいひどい状況でした。そんな酷い状況でも私たちの会社は海難救助のプロの集まりです。毎日順調に船を下ろしていきました。

そして、船の船長兼、潜水士の私は船を運転したり、潜水調査をしたりと多忙な日々を追われていました。

気仙沼港の中は津波の影響もあり、水中はいつも以上に濁りがすごく視界はほとんど無い状況でした。しかし、見えないからと言って仕事ができないわけではありません。見えなくても手さぐりで仕事をしていくのがプロフェッショナルだと私は思います。

水中調査、船体調査、水中溶接、水中切断、水中玉掛け。どんな状況でも仕事をこなしてくるのが一流のダイバーです。

今回の現場は自分にとってもいい経験になりました。そして月日が経ち、当初予定していた救助の数はどんどん増えて行き、8月10日の最終日で、合計漁船47隻、油タンク5基の救助及び撤去が完了しました。長いようであつとゆうまの4ヶ月。全員で一丸となった仕事。一生忘れられない仕事になりました。

当初は不安で一杯だったのですが、先輩達の励まし、仲間同士の助け合い、地元の人達の暖かさ、本当に気仙沼に来てよかったとつくづく思いました。被災にあった地元の方々はとても暖かく、逆に僕らが励まされることもありました。この震災で本当に絆というものを体感しました。地元の方々は「遠い所からご苦勞様」「船を助けてくれて本当にありがとう」、こんなにも感謝されたことはありませんでした。でもその一言で嫌なことも疲れも飛んで行き、4ヶ月間休みがなくてもやってこれたのかもしれない。

今回の震災は歴史上に残る震災です。しかし、人と人の助け合い、感謝の気持ち、思いやり。これを絶対に忘れずに、これからも頑張って仕事をしていきたいと思っています。まだまだ復興には時間がかかりますが、東北のみなさんを心から応援しています。

ふぐ すっぽん 季節料理

京魚川

同窓生諸兄のご発展をお祈りいたします

〒135-0046 東京都江東区牡丹3-21-4

電話 03-3643-0802

片岡 尚友 (新13F)

(室川)

念願の二宮金次郎像に喜ぶ塚田社長

二宮金次郎の像建立

「勤勉、精神で商品開発

越後菓草

草 (塚田久志社長) は本
上越市小猿屋の越後菓

社前に二宮金次郎の銅像を
設置し、二十一日に関
係者を招き除幕式を行っ
た。
長年、金治郎の銅像の
建立を実現したいと考え
ていた塚田社長は、創業
三十八年を迎えられたこ
とに感謝の気持ちを込め
て設置を決意。富山県の
業者に制作を依頼し、台
座を台わせて高さ約二尺
の像が完成した。
除幕式は取引先や地元
町内会、従業員ら四十人
が出席した。塚田社長は
金次郎の書いた「勤勉」
から「金次郎さんに少し
でも近づけるように毎日
研究し、お客さまから喜
んでもらえる商品開発を
行い、お客さまや地域の



▲新潟日報 掲載

お役に立てる企業であり
たい。長年つくりたいと
思っていた」と話し、建
立像のお披露目を喜んで
いた。

Itoigawa Geopark
大地の公園
糸魚川世界ジオパーク

全国53校の水産高等学
校のうち、番目に古く1
14年の歴史をもつ新潟
県立海洋高等学校(旧新
潟県立能生水産高等学
校)の練習船・海洋丸(総
トン数299トン)が7月
6日、東京
・中央区の
豊海水産埠
頭に初入港
した。同校
の卒業生で
組織する
「能水会」
に所属し首
都圏に在住
するOBら
約26人は翌
7日、「海
洋丸」を訪
ね、後輩の学びの場を見
学。船長や指導教官に工
業丸を送るとともに、後
輩たちの将来への飛躍を
祈願した。

東京に初入港

新潟県立海洋高 海洋丸にOB集う

冒頭、久保
田裕貢船長
は、「30年余
で東京港への
入港は初め
て」と、本航
海が指導教官
らにとっても
特別だったこ
ね、後輩の学びの場を見
学。船長や指導教官に工
業丸を送るとともに、後
輩たちの将来への飛躍を
祈願した。



操舵室で説明を受ける県立海洋高
OB



海洋丸と豊海埠頭をバックに記念
撮影



粕漬・切身・味噌漬・干物製造卸
有限会社 松田食品 (新10製)
取締役会長 松田修一

〒410-0813 静岡県沼津市上香貫三貫地二一六九一五
TEL (055) 9331137(代)
FAX (055) 9341130(代)



物故者名簿

19	養	伊藤 峰宗(平塚市)	H22.11.8	没
26	製	小林 義雄(新潟市)	H23.5.5	没
28	製	杉原 又男(東京都)	H22.2.26	没
28	製	村山 進(東京都)	H22.11.25	没
31	製	小林 壽慶(糸魚川市小見)	H23.9.7	没
32	製	川崎 俊平(新発田市)	H23.9.18	没
32	製	渡辺嘉八郎(旧姓小林能生)	H24.8.1	没
34	養	大谷 実(ひたちなか市)	H22.2.13	没
34	養	清水 文男(青海)	H24.1.18	没
35	製	渡辺 康雄(滋賀県)	H18.7	没
38	製	伊藤 與作(滋賀県)	H24.3.10	没
39	漁	重田 幸治(三浦市)	H23.1	没
39	製	小林 茂資(糸魚川市寺島)	H24.3.13	没
新3	増	菲塚 五郎(旧姓園田船橋市)	H22.5.1	没
新7	漁	細谷 俊(上越市名立区)	H24.5	没
新7	製	中村 節夫(所沢市)		没
新7	増	的場 邦雄(石川県)	H22.9.28	没
新8	製	室橋 卓(横浜市)	H24.5.17	没
新9	製	関矢 正(福島県)	H22.10.17	没
新9	増	比護 洋司(市川市)	H22.7	没
新10	製	佐藤 秋雄(静岡市)	H23.9.6	没
新11	増	平原 通裕(横浜市)	H24.8.31	没
新12	製	山岸 載史(相模原市)	H23.2.26	没
新12	製	上野 勇司(広島市)	H23.9	没
新13	増	池原 宏二(川口市)		没
新20	漁	水沢 秀文(神奈川県)		没
新21	製	大島 敏徳(上越市)	H24.8.8	没
新30	漁	高木 稔(横浜市)	H23.12.26	没
新30	機	菊岡 修(糸魚川市)	H24.3.13	没
新32	増	山本 慎(糸魚川市)	H23.7.8	没
新32	増	大久保さちえ(旧姓塚越千葉県)	H23.10.26	没
新43	食	杉本 英則(静岡市)		没
海17	食	渡辺 大師(糸魚川市筒石)	H23.9.22	没
旧職員		久保田昌治(上越市)	H23.9.4	没
旧職員		湯尾 莊一(糸魚川市能生)	H23.9	没
旧職員		山田 修(糸魚川市根知)	H23.12.13	没

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務局からのお願い

新旧校歌・応援歌CD販売について

この度、旧制校歌・新制校歌及び応援歌（満目を同窓生のご協力で収録致しました。

3曲入り送料込みで1,300円販売致します。

懐かしい校歌・応援歌を是非お買い求め下さい。

ご希望の方は会費振込用紙に「CD希望」とご記入頂き、会費等と一緒に1,300円を振り込み下さい。

尚、発送は11月となります事をお許し下さい。

編 集 後 記

会報が皆さんの手元に渡っている頃は、能生平野の田園は黄金色に変わり稲刈りが始まっていると思います。

暑かった夏も終わり秋風が心地好い季節です。

この夏、オリンピックも熱かったです、母校の相撲部もインターハイの個人戦で村松選手が優勝し、見事高校横綱に輝く大活躍でした。本当におめでとうございます。団体戦は後一步のところで強豪に敗れてしまい残念でしたが、まだ国体があります。きっと雪辱を果たしてくれると信じています。

海洋高校に替わってから20年が経過しました。

後輩の活躍に負けられないよう、皆様も無理をせず精一杯頑張ってください。

またお会いできる日を楽しみに……

お 願 い

会報「日本海」への原稿及び広告掲載のお願い。

- ① 原稿 800字程度、一太郎、ワード等による場合にはフロッピー（SD,USBメモリ）送付いただければありがたいものです。ご自身の写真も1枚お願いします。
- ② 広告 掲載規格は6,5cm×8,7cmとなりますが、既に掲載された広告を参考にしてください。掲載料金は1件10,000円となります。

会報「日本海」編集委員

広 報 委 員 長	S 5 i	佐 藤 優
副 委 員 長	S 1 1 B	富 田 達 治
委 員	S 1 1 B	岡 崎 辰 三
委 員	S 1 8 F	伊 藤 清 正
委 員	S 2 1 B	田 中 道 夫
(写 真) 委 員	S 2 1 i	家 崎 長 治

広報連絡先

〒949-1352 糸魚川市大字能生2115-10

TEL・FAX 025-566-3094

責任者 佐藤 優

発行者 社団法人 能水会

同窓会事務局

〒949-1352 新潟県糸魚川市大字能生3040

新潟県立海洋高等学校 内

TEL 025-566-3155

FAX 025-566-4781

事務局長 渡辺 宏 幸

事務局携帯 090-5547-8832

E-mail watanabe.hiroyuki@nein.ed.jp

海洋高校のホームページがありますのでご覧ください

E-mail: school@kaiyou-h.nein.ed.jp